

今日の演奏会について

根ほり葉ほり

一問一答

2020/12/12 紀尾井ホール

問う人：Bunsho Mifune

答える人：三船文彰

台風一過の2020年10月の岡山県北の棚田のほとりの柿の木の下にて。

問：随分とのどかな場所に来てしまいましたね。

答：春以来、世の中のコロナ自粛のお陰で、岡山の県北の美作一帯をくまなく、心行くまで探索させて頂きましたよ。素晴らしい景色や由緒ある神社仏閣ばかりなのに、だれもいないので、ここはもしや天国？と感嘆の声をあげながら。

問：そんなに何回も来てどうするんだい？

答：季節ごとの景色や空気が違うのだから、何回も来たくなるのは当たり前でしょう！

問：それは、演奏会がすぐ目の前の、お尻に火がつきまくっている人が言うことか！

聞けば、二大チェロソナタの演奏会とか、方々に吹聴しているではないか！

最も難しいチェロソナタを2曲弾くということ？

答：正しくはピアノのパートが難しいチェロソナタということですが。

チェロのほうもなかなか一筋縄にはいきませんが。

問：ピアニストが苦しんで、チェロは口笛を吹きながら弾けるということ？

答：ま、そういうチェロ弾きもいることでしょう。チェロのパートも難しいですよ。弾こうというピアニストが減っては困るから、あまり大きな声で言わないほうが良いですが、ピアノパートの大変さは、ちょっとやそつとではないらしい。

ショパンのチェロソナタを演奏したことがあるピアニストは、みんな口を揃えて「あれは難しいよ！」と言います。

ラフマニノフのチェロソナタでも、弘中先生は15年前にとある知名なチェリストから頼まれ、気軽に引き受けて練習をしてみたら、それから3か月間どこに行くにしても、楽譜を持ち歩いたと仰ってました。そのあと、アメリカへピアノコンクールの審査員で行かれた時には、同僚のピアニストから「気をつけろよ！あれは2番のコンチェルトより難しいぞ」と忠告されたとか。何しろ二人の大作曲家かつ大ピアニストが書いた曲だから、簡単なはずはないでしょう。その上、2曲ともチェロがまたきれいな旋律で、ピアノが悪戦苦闘しているのに、良い所はすべてチェロに持って行かれる。「ショパンとラフマニノフ先生！本当にありがとう！」と、演奏したことがあるチェロ弾きは、みんな心の中で感謝していると思いますよ。

問：ということは、3 拜 9 拜して頼んでもピアニストはなかなかうんと言っ
て、弾いてくれない曲ということかね。

答：それが、実は世のチェロ弾きもピアニストもこの 2 曲の実態をよく知らない
ので、演奏会で取り上げられることは滅多にないから、そもそも頼むとか、頼
まれるとか、ということはあまり起こらないです。

問：ショパンの最後の大作をピアニストが知らないとは！

答：それは無理もないことですよ。ショパンはピアノの曲しか書いていない
のだと、一般の音楽愛好者だけでなく、大半のピアニストでさえも思っ
ているからです。この曲に心酔し、チャレンジしようというチェロ弾きから懇
願されない限り、自らチェリストを探してきて、やりましょう！とはなら
ないです。なぜなら、チェロとピアノが一体となって書かれているから、
ピアノの所だけを練習をしても、技巧的に難しい上、曲の全体像が掴
めないのです。練習をしてみても、大抵途中で断念することになるはず
です。

問：それでは、いくいく天国でショパン先生に合わせる顔がないではないか。
これほど力を入れて書いた最後の作品なのに。では、ラフマニノフのほうは？

答：知っているように、ラフマニノフは最も偉大なピアニストの一人の上
に大作曲家でもありましたので、作ったどの曲もとにかく技巧が入りま
くりで、小品でも少々の事では触れないくらいに難しい。(2 メートルの
長身で巨大な手だったということも関係しているかもしれませんが)

問：例のピアノ協奏曲第 3 番などは最も演奏が難しいピアノ協奏曲と言
われていますね。

答：ピアノソロの曲だけでも手一杯なのに、わざわざこのチェロソナタ
の大変なピアノパートを時間かけて練習して、チェリストを捕まえてきて
舞台上に立とうなんてことは、夢にも思わないですよ。その上この曲の
おいしい所、格好いい所は全てチェロに持って行かれているので、ピ
アニストにとって労多くして益少なしの曲ですよ。

問：では何故アマチュアのチェロ弾きごときのあなたが、日本を代表す
るピアニストの弘中孝先生と共演することになったのかね？

答：そもそもは 14 歳の時に、チェリストの岩崎洸先生に引き連れられ
て、なにやら分からない内に斎藤秀雄先生に入門したのがきっかけだ
ったのです。

問：斎藤先生とは、戦後の世界的に活躍する日本の演奏家を育てた名
教師ですね。

答：そのようなえらい先生とはつゆも知らず、結局弓の持ち方と左手
の指の並べ方だけを教えてもらっただけでしたが、その半年後にお亡
くなりになりましたので、私が最後の弟子となりました。そのあとは
自己流でチェロを弾いてきたのです。

問：それは、アマチュアだけでなく、もぐりそのものではないか！

答：結局、斎藤先生からは、右手の弓の持ち方や左手の指の弦の押さえ方には物理的な法則があるのだというヒントを頂いただけでした。音楽そのものや解釈について一番影響を受けたのは、もちろんピアニストのルース・スレンチェンスカ先生の演奏ですが。

しかし、斎藤先生のお宅にレッスンに通うことで、のちのち桐朋学園と関わりのある先輩の名演奏家たちと知り合うこととなったことは、人生に大きな彩りをもたらすことになりました。

その中でもヴァイオリニストの久保陽子先生とは20数年前から意気投合して、これまでに先生の演奏会を数十回企画しました。その流れでご主人様の弘中先生ともブラームスのピアノ五重奏などをこれまでも何回も共演させて頂きました。先生とは友人以上に、10歳年上の兄貴のような存在ですね。

10数年前に、弘中先生に私の所でのリサイタルをお願いしたら、「今、演奏を頼まれてラフマニノフのチェロソナタを練習している所だ。一緒に弾くなら行ってもいいよ。」ということで、楽譜だけは買い込んだが、本棚に仕舞い込んだまま、一生触ることはないと思っていた憧れの曲を、最高のピアニストと共演するはめになってしまったのです。

まさに、棚から牡丹餅！

実は、今日の演奏会の最大の見物は、歯医者でアマチュアのもぐりのチェロ弾きと最高のピアニストとの共演なのですよ。これはギネス記録かもしれませんよ！

問：それはどういうこと？

答：アマチュアのチェロ弾きがこの2曲に憧れ、必死に練習を重ねたとしても、強調してきたように、かなり腕が立ち、その上音楽の作り方も熟知したピアニストが共演してくれないことには絶対に舞台には上がれないです。

そもそもアマチュア・ピアニストではとても歯が立たないので、バリバリのプロのピアニストに頼むしかありませんが、たとえ運よくプロのピアニストに知り合いがあっても、アマチュアのチェロ弾きのために、他の仕事をやめてまで、長い時間かけて、この2曲の1曲でも練習してくれるはずはないし、万々が一、一緒に舞台に立ってくれたとしても、アマチュアのことだから、もしチェロの演奏が崩れた場合、自分のキャリアに傷が付きますし、良いことが一つもないので、けんもほろろに断られるに決まっていますよ。

問：ということは、あなたが弘中先生と共演出来るということが、まさに奇跡に近い幸運ということか。ま、ほとんど柵から牡丹餅の人生を送ってきたあなたらしいことだが。ルース・スレンチェンスカ先生との出会いもそういうことだろう？

答：そちらは、柵からチラノザウルスですよ。

出会ってからこの15年間、先生の目の前に人参をぶら下げて走らせ、最強の演奏活動をして頂きましたが、93歳にサントリーホールで若いピアニストでも驚いて尻もちをつくようなプログラムでリサイタルをし、さらに95歳の今年に、ベートーヴェン生誕250年を記念する演奏会をするからと、岡山と東京コンサートの準備をさせられましたが、96歳目の今でもその勢い制御不能です。

20世紀の音楽史に身を置いてきた方なので、実際に出会われた諸大家のエピソードを、音楽書によくある、コピーからのコピーのような伝聞ではなく、特に、唯一の弟子として（9歳の時に！ラフマニノフの代役を務めた後、2年間師事した）、師匠のラフマニノフのことを沢山聞いたのはラッキーでしたね。

大分前にラフマニノフのチェロソナタの第3楽章を弾いて、ルース先生にお聞かせした際、「私は彼のことを良く知っていますよ」、と言われました。

ラフマニノフを良く知る人に、ラフマニノフの曲を聞いてもらった！二人の師弟の関係はもちろん良く知っていましたが、ルース先生のこの言葉で、時空を超えて、ラフマニノフの書いた音符の一つ一つが自分の体に入り込んだ気がしました。

問：歴史に繋がるのがクラシック音楽の醍醐味なんだね。

答：200年前から今でも演奏されている西洋のクラシック音楽の名曲は、ほぼ間違いなく、優れた作曲の才能の持ち主が、さらに天の啓示を受けて書き残したものだとは私と考えております。そういう曲を通して作曲者とだけでなく、天と繋がるのが究極の醍醐味でしょうね。

問：なんだか哲学的な話になってきたね。

答：しかし、ことはそんなに簡単には運ばないです。

実はわれわれは一つの作品を演奏者が出した音以上の世界を感受しえないので、本当は素晴らしい曲でも、演奏する人次第で天に繋がる所か、地獄に連れて行かれるかもしれないです。

問：それはかなり危険な発言だね。自分の演奏のことを言っているのか！

答：（無視を決め込んで、続ける）

天一作曲者—演奏者—聴く人、が一本の線で繋がったときに（私のいう「四位一体」）、無限のエネルギーが体に注ぎ込まれる感覚（悟りと言ってもいいかも

しれません)が生まれ、それが究極の感動、醍醐味ということだと思ふのです。

まあ、一生に何回も出会えないことですが。

問：ショパンのチェロソナタは一部の楽章が駄作だと書いている人がいるようだが。

答：それは運がよろしくない方ですね。確かに非常に手の込んだ内容の曲です。

一回聴いたくらいでその構造を理解し、良さを感じるのは難しいでしょう。その方は恐らく良い演奏を聴いたことがないか、もしくは聴き込んでいなかったとしか考えられないですね。

まず、ショパンは天才だ、ということを忘れてもらっては困ります。ましてや36歳という円熟期に入った時に、ピアノ以外の楽器にチャレンジして、渾身の力を込めて作った曲です。

ジョルジュ・サンドがショパンの創作の状況を「彼は、一小節を書くのに、部屋の中で呟吟徘徊しながら100回は消しては直し、しかし翌日にまたそれを書き直したのです」と書き記したように、常に全身全霊で作品を生み出そうとしていたショパン先生が下手な作品を残すはずはないのではないか！

これはまさに横綱級の内容の曲ですよ。作曲技法、演奏の難易度、構成...どこからでもかかってこい！というような曲です。

問：ではラフマニノフのチェロソナタの評判は？

答：こちらはさすがに美しい旋律に溢れている曲なので、受けがいいですね。

第1番の交響曲の演奏の不出来から強度の神経衰弱に陥ったラフマニノフが28歳になって立ち直って、作ったのが最高の名曲ピアノ協奏曲第2番。インスピレーションに満ちた名旋律の玉手箱のような不滅の名曲です。

私は小さい時からいろんなレコードやCDで千回以上は聴いてきましたが、いまだに飽きることはありませんね。ピアノ協奏曲第2番を書いたその勢いで、続けて作曲したのがこのチェロソナタですから、協奏曲で書き切れなかったアイデア、旋律をこちらに回したのではないかと、私は思っていますが。ま、双子のような作品ですね。

ラフマニノフ自身もかなりその出来が気に入っていて、のちに「なぜ先生はヴァイオリンソナタを書かないですか？」と聞かれ、「私にはすでに素晴らしいチェロソナタを残しているのに、どうしてまたヴァイオリンソナタを書かなくてはいけないのか？」と答えたとのこと。

問：ショパンも亡くなる8か月前の、最後となる演奏会で、チェロソナタの第3楽章を弾いているし。

二人の大ピアニストはなぜチェロを大事に扱ったのでしょうか。

答：それこそ伝聞からの推測ですが、たまたま二人とも生涯の親友がチェリストだったことが一番の要因ではないでしょうか。

チェロの技巧的な扱い方をも熟知しているだけではなく、(ショパンの方は、何か所か、「この音の連続は、チェロではピアノのように簡単には弾けないですけど」と、ぼやきたくなる難所がありますが) 親友と弾くことを前提に(両方とも、もちろんそれぞれに献呈しています) にしているのです。敬意を感じさせる、暖かみと親しみのある美しい旋律を惜しみなくチェロに与えて、弾いていてそれぞれのピュアな友情を感じるのです。

問：それは新しい解釈だね。

答：親友を持つことは人生において、一番大事なことですよ。

問：具体的にそれぞれの曲はどんな内容になっているのか？

答：2曲とも同じト短調で、4楽章。ほぼ同じような展開。これは明らかに、ラフマニノフが大先輩のショパン(チェルニーまで遡れば同じ流派)のこの曲の由来までも知っていて、チェリストの親友のために曲を書くのに手っ取り早くショパンのチェロソナタと同じスタイル、(そっくりのアイデア!)を踏襲したとしか考えられませんね。

4楽章の構成は、物語を描写するのに都合がいい起承転結の形式。

両曲とも雄大なスケールを持った、どちらかと言えば男性的な雰囲気の内容。ショパンのほうはもっと内省的、構築感に溢れており、第3楽章はまさに天国的な清らかな美しさです。私見ですが、ショパンが作ったもっとも素晴らしい旋律の一つだと思っています。

ラフマニノフのほうは、全編を貫いているのは広大なロシアの大地への郷愁——再び戻ることの出来ないふるさとへの思い。もっと言えば、再び戻ってこない日々や出会への追憶。

特に、ラフマニノフの作品によく登場する彼のふるさとの教会の鐘の音(第2番のピアノ協奏曲の冒頭がまさに鐘の音そのもの)のモチーフが効果的に使われていますね。

私個人的には、ある英雄の生涯をドラマチックに表現した作品だと感じておりますが。

傷つきながらも戦い、奮闘し、遠く離れた家族を思い、神に祈り、そして力を振り絞って、残る日々を悔いなく、輝かしく生き抜いていくという、ま、

結局、だれの人生にも当てはまる物語ですが。

問：またまたいつもの如く、空想妄想のし過ぎではないか。

答：まったくその通りです！私のような凡人が頭をひねって探った天才の作品のごく一部分でしかないですが。10年以上この2曲に向き合ってきて、いまだに飽きないのは、曲が精巧に作られているので発見する悦びがあり、ピアノとチェロが一体となって初めて全体像が見えてくる合奏の楽しさ、二人の作曲家の心に常に触れられ、弾いていて毎回感動出来るからでしょう。

問：やはりこの2曲はチェロソナタの中でも特別な存在なのか。

答：作曲家二人とも素晴らしいピアニストなので、ピアノのパートが技巧的で華やかに書かれているのはもちろんですが、チェロのパートも、チェロという楽器を知り尽くしていないと書けないような内容なのです。

問：具体的に言うと？

答：チェロという楽器の魅力は、ピアノに次ぐと言われる、大地を揺るがすような低音から、小鳥がさえずるような高音までの広い音域を持っていること、そして、人間の言葉の発声に近い、語りかけるような音も出せれば、オペラ歌手のように朗朗、切々と歌うことも出来る、ということでしょうか。しかし、何と言っても、一音だけで聴く人の心を震わせ、感動させることが出来る楽器がチェロなのです。

この2曲のチェロソナタはそのようなチェロの特性が十分に生かされているので、その意味でも、まさにチェロ弾きの冥利に尽きる曲です。

問：チェロって、良いことづくめの楽器に聞こえるね。

答：うまく弾くことが出来れば、ですが。弦が太い分、弦を押さえるのにヴァイオリンの数倍も力が必要の上、一音一音の間隔が広いので、速いパッセージの運動量がヴァイオリンの数倍、(つまり同じ曲を練習するのにヴァイオリンの数倍時間をかけないと同じ精度にならない)。その上、体積が大きいから音程が甘くでもいいと言うことがまったくなくて、ヴァイオリンと同じく0.1ミリでもずれたら、素人でも音が狂っているのが分かるので、正確な音程で演奏するだけでもあっぱれ、というくらい厄介な楽器でもあります。

問：よくも飽きずに、取り組んできたものだね。

答：ヴァイオリンより少ないながらも、世にチェロの名曲も沢山残っているので、生きている間に、せめて一曲でも良いように演奏したいと思っていますよ。

問：もう死ぬまで、ショパンとラフマニノフの2曲だけを極めて頂戴！

答：それだけ弾き続けるだけの価値のある曲ですね。あと、フランクのソナタと合わせて、この3曲をライフワークにしようと思っておりますが。

私だけが思っているかもしれないですが、ショパンとラフマニノフのこの2曲は、ともに作曲家が再起をかけた、力の入りまくった作品だと思います。ショパンのほうは、36歳の亡くなる3年前、ジョルジュ・サンドとの愛の破局と体をむしばむ病魔という、心身ともに疲弊しきっていると思われるその時期に、ピアノ独奏ばかりを作曲してきて、その道のスペシャリストとして自他とも認められてきたことに安住せずに、室内楽の分野をも開拓しようと奮起して、チェリストの親友フランショームがそばにいて、手始めにチェロソナタを書いたのだと思います。自分の作曲の技量を知らしめるために、手の込んだ曲になりましたが。(その20年後に作られたブラームスのチェロソナタよりも時代の先を行っている作品だと私は思っています。)よく、晩年の作、最後の作だから、侘び寂びが作品から滲み出るとか、作曲家の世を去る前の心境が反映されているとか、思い入れたっぷりに語る人がおられますが、大体作曲家本人が3年も前に、自分が間もなく死ぬなんて、考えますか！

そもそも真の芸術家というものは、例えまもなく死ぬと分っても、変わらずエネルギーに溢れた作品を作り続けるものなのです。

ラフマニノフのほうは、ショパンとは逆に、心の病から立ち直った28歳の青年期の作曲。溢れてくる楽想の奔流に身を任せ、自分の来し方を振り返り、チェリストで親友のブランドウコフとともに輝かしい未来を祝福する気持ちでこのチェロソナタを書いたのではないかと、勝手に推測しております。ショパンとラフマニノフのチェロソナタには、友情と再生のメッセージが込められている、というのが私の解釈です。

問：それにしても、ショパンとラフマニノフのチェロソナタの2曲だけを並べた演奏会は、それこそレストランで前菜もデザートもなしで、いきなり分厚いステーキ2枚を目の前に出されるようなものではないか！

答：アマチュアはとにかく客の事は考えませんからね。その上、お客を集めて、逃げられないよう、ドアに鍵まで掛けて、「作ったから、さあ、召し上がれ！」と、強要したりして。

問：それは、お客さんではなく、犠牲者と言うのではないか！

答：.....

問：さて、ここまで、今日の演奏会にご参加の皆様が読んで下さったら、ちょうど開演の時間になるでしょう。

答：なんと！演奏前の時間つぶしのためにこの問答を続けてきたのか！

問：だって、「演奏会に参加する際の感染予防マニュアル」の中に、「会場に入ったら、だれにも声をかけてはいけません！」と、あなたが書いたのではないか！

皆さんが開演前までの時間を椅子に腰かけたまま、精神統一、瞑想までもして、感覚がさらに研ぎ澄まされた状態で演奏を聴かれたら、冷や汗をかくのはあなた自身だから！

答：そういうことなら早く言って頂戴！

これでは一問一答ならぬ、愚問愚答となってしまったのではないか！

問：愚問愚答で皆さんの神経が緩んでくれて、助かった、と思わないかい？

さあ、ドアに鍵もかかったし、料理を出して頂戴！

答：かしこまりました！

ところで、今日は実はデザートも作りました。

ドヴォルジャークの「4つロマンチックな小品」作品75第4曲

こちらは無理をして召し上がれと、強要はいたしません…。

問：そう来ると思いました！